



「見出される」

「神から与えられている賜物を常にさぐり、発見し、他の牧師と決して比較せずに伝道者の業を行うように祈っています。」中央聖書神学生時代、教会での実習期間を終え、頂いた寄せ書きの一文でした。しかし私は神学生時代この言葉の真逆の事をしていました。神学生と自分の能力をよく比較しては「あの人のように大胆に話せない」「あの人のようにテキパキ奉仕が出来ない」「勉強の成績も良くない」こんな具合に比較しては自分には何も無いように思えて落ち込んだりしました。上級生に近づけば近づくほど、卒業後の事を意識し、「自分は牧師としてやっていけるのだろうか？」と激しい不安に襲われたりもしました。

そんな時、たびたび思い出す言葉が冒頭の色紙の言葉です。私はこの言葉に支えられたのです。そして今でも大切にしている言葉です。神学生時代、私の犯した過ちは見出してくれる人を見失ったという事です。誰よりもその存在を認め、賜物を与え、それを生かす道のりを用意される神様の言葉を信じる事が出来ていませんでした。何か輝く物を持っている人ばかりを見て自分の持っているものを見ようとしていなかったのです。あの人のような賜物は持っていないかもしれないが、自分の与えられている賜物を探してみよう。そう祈りだしてから、だんだんと人の事を比べなくなりました。何故なら神様がいつも見て下さっているのは あの人ではなく私だったからです。ようやく気付いたのかい？とでも言われているようでした。一番の賜物とはこの方の愛に答えたいという心(ハート)です。その心が定まっていくときにその賜物は開かれていき、その人の持つ賜物を通じて神の栄光が

現わされていきます。

神の愛をこの世で語る事は勇気がいります。御言葉を語るだけではなくクリスチャンとして生活する事も同様です。神の愛に価値を感じない人はその人に対して批判します。それは言葉だけではなく態度や空気感で表す人もいます。今日読んだ盲人の両親は批判する方をおそれて真理を語る事を拒みました。しかしその息子である盲人は批判を恐れずイエス様との出会いを語りました。ここに私達が学ぶべき姿勢があります。私達が負うものは私達には神の計画があるという事です。それは「遣わされる者」と言う言葉が自分の言葉になるという事です。そのためには非難や批判を乗り越えなければいけません。その事を乗り越えるカギは、自分は見出された存在ということ信じぬくことです。何時も書くことですが大事な事は私達が何かを持っているから選ばれたのではなく、神の無条件の愛によって私達は選ばれたのです。失敗を恐れ、汚れを恐れ、批判を恐れる私達が強くなれるのは、ただ十字架のイエス様の愛によってのみです。共に主を見上げて、前進してまいりましょう。

